［島根県古代文化センター　主催］
島根の歴史文化講座＋オンライン　第2講　／　令和二(二〇二〇)年十一月二十二日

出雲国風土記の神話と伝説

皇學館大学　橋本　雅之

一、限界を迎えた記紀史観

（1）記紀を中心とした歴史観（記紀史観）

・戦前→神話と歴史の混同

・戦後→戦前の反動としての神話の否定と解体

※このような研究は、いずれの立場であっても歴史や文学の研究がそのイデオロギーを越えることができないという限界がある。

（2）記紀史観を乗り越える可能性

・考古学の発掘調査の目覚ましい成果が新たな道を切り開いた。

二、風土記史観という視点

古代の各地に生きた名もなき人々の「生活史」を浮き彫りにして、イデオロギーに左右されない「里の暮らし」を再現することを目的とする歴史観とそれに基づく古代研究の新たなフィールド。

※拙著『風土記　日本人の感覚を読む』（角川選書）参照

三、「国引き神話」を見直す（細川家本を校訂して訓読した）

【国引き第一日目】

意宇と名付けし所以は、国引きましし八束水臣津野命、詔りたまはく、八雲立つ出雲国は、狭布の稚國なるかな。初国小ひさく作りたまふ。かれ、作り縫はむと詔りて、栲衾志羅紀の三埼を国の余り有りやと見れば、国の余り有りと詔らして、童女の胸鋤取らして、大魚の支太衝き別けて、はたすすき屠り別けて、三身の綱打ち挂けて、霜つづら繰るや繰るやに、河船のもそろもそろに、国来、国来と引き来縫へる国は、去豆の折絶よりして、やほに杵築の岬これなり。此をもちて、堅め立てし加志は、石見の国と出雲国の堺にある、名は佐比売山、是なり。また、持ち引ける綱は、薗の長浜、是なり。

（国引き第二日目から第三日目までの詞章は略す）

【第四日目、国引き完成後の八束水臣津野命の言葉と行動】

「今は、国引き終へつ」と詔りたまひて、意宇社に御杖衝き立てて、「意恵」と詔りたまひき。

（1）国土創生の奇跡を語る神話

・『旧約聖書』の創世記（岩波文庫本、関根正雄訳）

始めに神が天地を創造された。（中略）神はその創作の業を七日目に完了し、七日目にすべての創作の業を休まれた、（九頁～十二頁）

（2）神が活動する時間

・益田勝美『火山列島の思想』（『益田勝実の仕事２』ちくま学芸文庫）

夜が明ける――伝承の世界では、それはずっと後世までも、単なる時間の推移ではなかった。第一にそれは鬼の退場の時刻であった。（十二頁、中略）夜明けという、夜と朝の間を断つふしぎな断絶のクレバスの底知れない深み。―そこではどのような魔力ある者のやりかけの仕事も、すべて停止するばかりか、一瞬にしてそのまま岩となり、山となる（十四頁、中略）神々の時間であった夜が明け放たれ、時間切れの神々が退散していった後の朝の風景の中で、神々の時間に語られ演じられた伝承の残像を見出そうとする心の営みが反復されてきて、このような想像の方式が形成され、固定していったのではなかったろうか。（二十六頁）

※神の行為と時間の関係については、柳田国男「一つ目小僧その他」のような巨人伝説の紹介がある。

（『定本　柳田国男全集　第五巻』、筑摩書房、一九六八年）に次

榛名の方ではまた榛名富士が、駿河の富士よりも一もつこだけ低い理由として、その傍なる一孤峰を一畚山と名づけてゐる。或ひはそれを榛名山の一名なりともいひ、今一畚たらぬうちに、夜が明けたので山作りを中止したとも伝へる。（『定本　柳田国男全集　第五巻』、三一二頁）

（3）これまでの主たる学説

本居宣長「玉勝間」（『日本思想大系　本居宣長』、岩波書店）

・意恵とは、事に労きて苦しきを、休息ふ時の声なり。（三二八頁）

加藤義成『修訂　出雲国風土記参究』（今井書店、初版一九五七年）

・伝承者たる先人が、みずから狭い耕地を広くすべく余った土を引き、欠けたところを補って父子相ついで開拓殖産に従った面影をまざまざと反映するもの（七八頁～七九頁）

石母田正「古代文学成立の一過程」（『日本古代国家論第二部』岩波書店、一九七三年）

・（ある晴れた日に）、ゆるやかに巨人が引いてくる後半の光景（三十五頁）

荻原千鶴『出雲国風土記　全訳注』（講談社学術文庫、一九九九年）

・朝鮮半島や北陸から、土地に綱をつけて引き寄せてきては縫い足して、出雲島根半島を作りあげたという壮大な神話だ。（中略）古代の生活者の実感がこもっていること、それがこの神話を生きたものにしている。（三九頁～四一頁）

『解説　出雲国風土記』（島根県古代文化センター、二〇一四年）

・ヤツカミズオミヅヌは、この動作を四回繰り返し、国引きをおこなった。（中略）成立の歴史的条件として地域社会における集団労働があったのである。（コラム１　五十七頁）

（４）八束水臣津野命は、いつ「国引き」の仕事を成し遂げたのか

（ア）神が活躍する時間帯→夜

（イ）広く分布する「ダイダラ坊」伝説→夜明けとともに神は活動を停止する。

（ウ）神の活動停止とともに作りかけた山や土地は永遠に凝固する。

（エ）神の時間帯である「夜」に四日間で成し遂げた国土創生神話

四、日本海で生まれた「国引き神話」

―海からの視点、発想を転換する―

（１）これまでの解釈

石母田正「古代文学成立の一過程」

・ここにあげられている出雲の岬や半島や山々は、一つ一つをとってみれば、いずれも古代出雲人にとって親しみ深い土地であり、よく知られた名所でもある。（中略）国引きの詞章の中には、六―八世紀のあいだに出雲人が中央との交渉のなかで得たシラギやコシの知識がはいってきていることを承認しなければならない。出雲地方の自然の地形が詞章に表現されたような統一ある景観―たとえ観念的にせよ―としてとらえられるためには、その視点の中心になるところ、いいかえれば作者の立つ場がなければならないが、それが国造一族の拠点たる意宇の地にほかならないのである。（中略）このような形で詞章が完成された段階と基盤は、一般的にいえば、出雲国における国造層の支配であるといえよう。（七頁～四八頁）

松本直樹『出雲国風土記注釈』（新典社、二〇〇七年）

・出雲全土の地形と隣接国との地理関係にも精通した国造が、国府のある意宇郡からの視点をもって、入念に計算しながら纏め上げたとうのが、いま我々の前にある国引き神話の実態なのである。（五一頁）

（２）海上からの視点

・半島を俯瞰できる場所はどこか？

・新羅・北門の国・高志の国はなぜ見えたのか？

・対馬海流の漁業の道を仮定する

・対馬海流の流速

気象庁ＨＰによると黒潮の約四分の一（黒潮は毎秒二メートル以上）

→対馬海流の流速毎秒約五〇センチ（時速約一・八キロメートル）

→二四時間で約四三・二キロメートル

→島根半島東西（美保関地蔵崎～日御碕）直線距離約六五キロメートル
→対馬海流に乗れば約三六時間で半島の端から　端まで移動できる

・海上での位置確認法「山立て（山あて）」
日本漁民の間で“山あて”と呼ばれる三角測量的漁場探索法が世界中で用いられており、漁民の頭の中には伝統的海図が描かれている。これは、船の構造や操舵術、諺なども含めた風や潮に関する知識と合わせて航海術とも言える文化要素であるが、漁労文化の重要な骨格を成している。（『文化人類学事典』縮刷版、弘文堂、「漁労・漁労文化」、二〇八頁）

（3）【仮説】

四回の国引きにおける、それぞれの境界ともいえる去豆折絶・多久折絶・宇波折絶は、漁民が海上から見た時の山立て（山あて）の目印だったのではないか→イラスト参照（皇學館大学の板井正斉氏の助力を得て作成した）

（4）私見

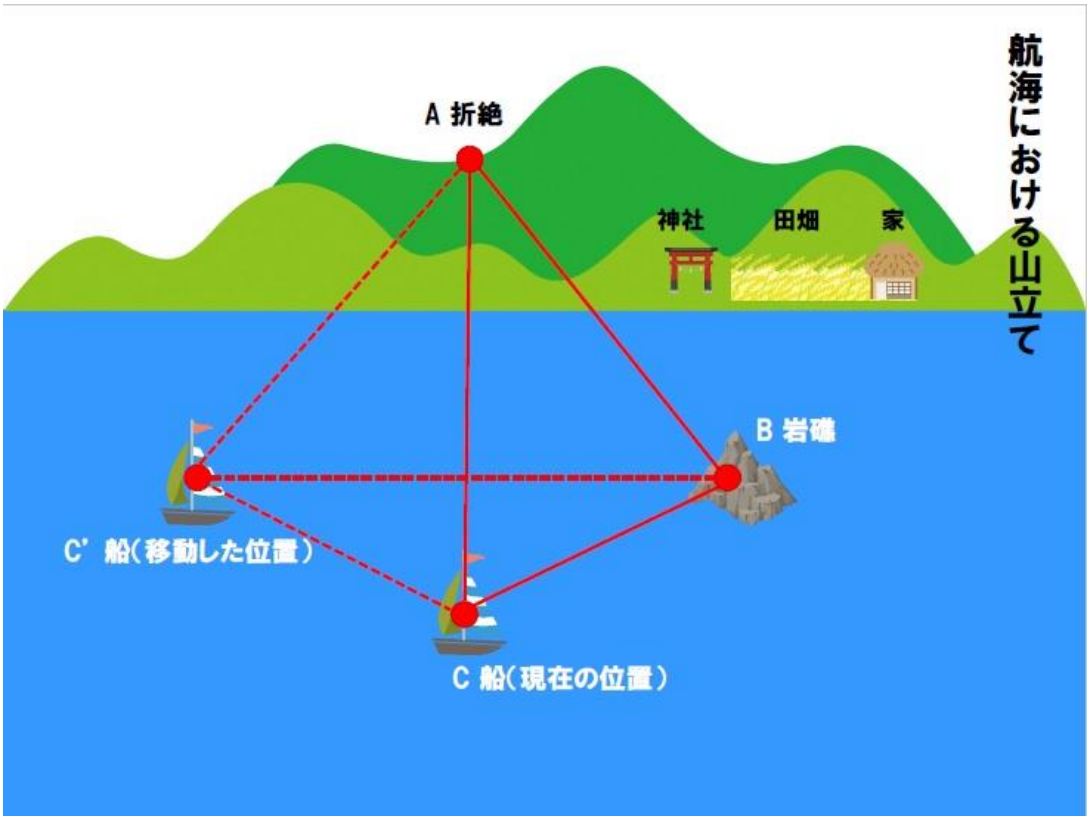
国引きは石母田正が「詞章が完成された段階と基盤は、一般的にいえば、出雲国における国造層の支配であるといえよう」と言うような形で整えられた伝説ではなく、本来は対馬海流に乗って日本海で漁をしていた出雲の漁民が伝えた伝承であり、当初から今見るような四夜の国土創世神話として誕生したと考えられる。その初期の伝承の記憶が薄れ、国造を中心として文化の拠点が内陸へと移行した後、農業や河川に関わる語句が組み込まれたのではないだろうか。何よりも、陸地を基盤とした従来の解釈では、新羅や高志の国が視野に入っていることの説明がつかない。これは例えば、対馬海流に乗ってズワイガニを追い、遠く能登半島まで漁に出た古代の漁民の存在を仮定してはじめて理解できる。この仮説が妥当だとすれば、国引き神話は古代出雲の名もなき漁民の人々を中心にした島根半島の生活史を伝える貴重な資料である。そしてそこにこそ、記紀では知ることの出来ない古代の「里の神話」「国土の神話」を伝える風土記ならではの価値があると言えるだろう。

五、今なぜ風土記史観が必要なのか

（拙著『風土記　日本人の感覚を読む』より）

経済、産業、文化が大都市に集中し地方の衰退が深刻化する中で、遅まきながら地方再生が叫ばれるようになってきた。産学官をあげてさまざまな構想が立案されているが、地方再生のヒントは、あるいは古代の「風土記」の中にあるかもしれない。郷愁を誘うだけでなく、それ以上の意味がこの言葉の中に隠されているかもしれない。その意味を見つけ出すために「風土記」を顧みてもいいのではないだろうか。それが、これまで「風土記」を読み続けてきた私がたどりついた結論である。（一九六頁）

【イラスト】



【出雲国風土記地図】